

と女院は御兄親宗の息の夭亡によって御軽服中であつたようであるから、結局二月には女院の長期にわたる内裏御滞在はむずかしかったのではなからうか。とすれば、一月二十三日後白河院・建春門院がお揃いで日吉社に御参詣になり、以後七日間院だけが御参籠、女院だけ翌日還御になったが、その間のことと見るのがいさばん可能性があるのではなからうかと思ふ。

頭中将さねむね、常に中宮の御方へまゐりて、琵琶ひき歌うたひあそびて、時々「ことひけ」などいはれしを、「ことさましにこそ」とのみ申してすぎしに、あるをり文のやうにてただかく書きておこせたり。

4 松風のひびきもそへぬひとりごととはさのみつれなきねをやつくさむ

かへし

5 よのつねの松風ならばいかばかりあかぬしらべに音もかはさまし

語釈

○頭中将―近衛府の中將で藏人頭を兼ねているもの。○さねむね―西園寺実宗。按察大納言公通の子。嘉応二年藏人頭。安元二年参議となる。当時第一級の琵琶の名手であつた。○あそびて―管絃のあそびをして。○ことさまし―興ざめ。○文のやうにて―手紙のやうにして。○松風―琴の音にたとえてある。琴の音を松風にたとえることは、「拾遺集」雑上

野宮に齋宮の庚申し侍りけるに、松風入ニ夜琴といふ題をよみ侍りける

齋宮女御

琴の音に峯の松風通ふらし何れのをよりしらべそめけむ

松風の音にみだるる琴のねをひけばねの日の心持こそすれ

とあるごとく、古くより行われている。「拾遺集」の「松風入ニ夜琴」というのは「李嶠雜詠」の詩題で、その出典もこの辺にあるのではなからうか。○ひとりごと―「こと」とは箏、琴などの外に古くは琵琶をも称した。絃楽器の総称なのである。「宇津保物語」吹上の上に「うへ琵琶の御こと」とある。前に「琵琶ひき歌うたひ」とあり、実宗は琵琶に秀でていたのだから、こゝも琵琶と解すべきであろう。独りで弾ずる琵琶。○さのみ―多くは否定の語を、ここでは反語を伴って、「何もそう一概に」という意に用いられている。○つれなき―気強く情に負けない、無情だという意味で、またそういう動作を受ける側からいえば、寄るべがない、さびしいというような意味となる。ここでは連、すなわち伴奏がないという意をも含ませている。○ねをやつくさむ―「や」は係助詞。音色のありったけを出しつくすことであろうか。○あかぬ―倦きることのない。○音もかはさまし―「まし」は反実假想の助動詞。わたくしが人並の弾き手なら、合奏もいたしましうに。実はそうでないから、合奏はできませんと婉曲にことわっているのである。

通釈

頭中将実宗がいつも中宮の御座所に参つて、琵琶をひいたり歌をうたつたり管絃の遊びをして、時々自分「あなたも箏をひきなさい。」などおっしゃったのを、「わたしの下手な箏などかえて興ざめでございませう」とばかり申上げて弾かないでいたところ、ある時手紙のやうにして、中にはただ次のやうに書いてよこしました。あなたの箏の音を合せず、わたしは一人で琵琶を弾じて、さびしい音のありたけを調べることでしうか。何もそう一概にひとりごとばかり弾かせるにはあたらないでしうかへし

わたくしの箏が人並みに聞かれる程度のものなら、どんなにか倦きることのない調べで合奏もいたしましうものを。

参考 頭中将実宗は、「語釈」の項にも示しておいたやうに、当時第一級の琵琶の名手であつた。「琵琶血脈」に

妙音院太政大臣師長公―実宗卿

と載せられているのを見て、その技倆の程が察せられるのであるが、彼が若くして世にすぐれた名手であつたことは、六条天皇の仁安二年法住寺殿の朝覲行幸の朝覲に弱冠二十三歳をもって琵琶を弾じているのを見れば理解できる。すなわち、「御遊抄」に

比 巴右中将実宗朝臣。權大師長